

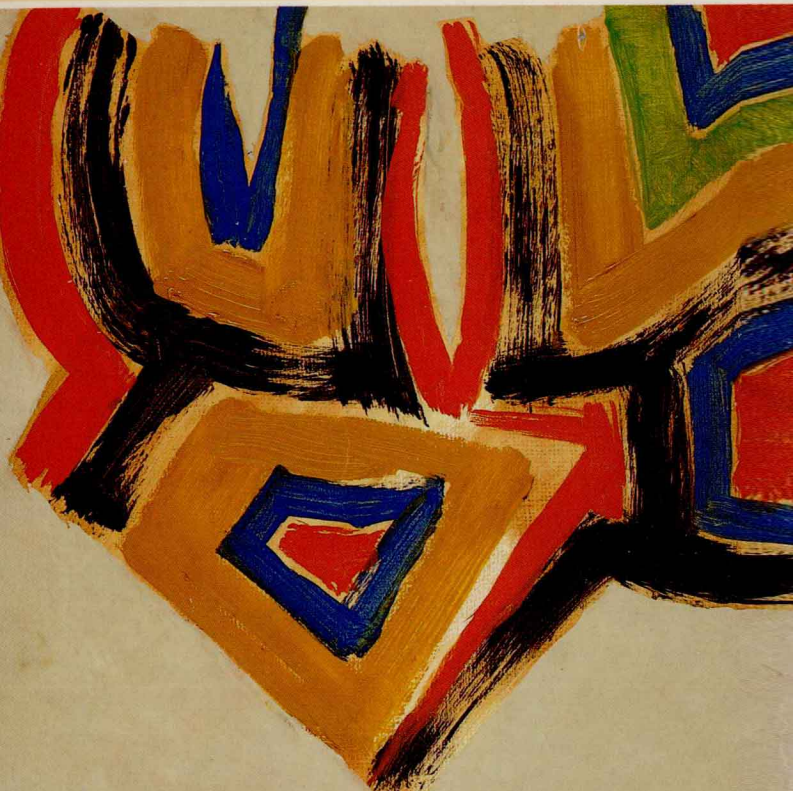
＜私立探偵ジョン・カディ＞

1608

死を選ぶ権利

ジェレマイア・ヒーリイ 菊地よしみ訳

TOKYO
HAYAKAWA
BOOKS



RIGHT TO DIE

A HAYAKAWA
POCKET MYSTERY BOOK

菊地よしみ

きくち

この本の型は、縦18.4センチ、横10.6センチのポケット・ブック判です。

昭和26年生 東京大学文学部仏文科卒

英米文学翻訳家

主訳書

「ニュースが死んだ街」「死の跳躍」 ジェレマイア・ヒーリー

「愚か者の戦場上下」 ロナルド・アーゴウ

「服従の絆」 ジョゼフ・ハンセン 他 (以上早川書房刊)

検印
廃止

〔死を選ぶ権利〕

1994年3月10日印刷

1994年3月15日発行

著者 J・ヒーリー

訳者 菊地よしみ

発行者 早川浩

印刷所 岩城印刷株式会社

表紙印刷 株式会社TKM

表紙製版 ミツミ製版株式会社

製本所 株式会社川島製本所

発行所 株式会社早川書房

東京都千代田区神田多町2ノ2

電話 東京3252局3111 (大代表)

振替 東京・6-47799

〔乱丁・落丁本は本社制作部宛お送り下さい〕
〔送料小社負担にてお取りかえいたします〕

ISBN4-15-001608-9 C0297

Printed and bound in Japan

ワ・ミステリ

JEREMIAH HEALY

死を選ぶ権利

RIGHT TO DIE

ジェレマイア・ヒーリイ
菊地よしみ訳



A HAYAKAWA
POCKET MYSTERY BOOK

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1994 Hayakawa Publishing, Inc.

RIGHT TO DIE

by

JEREMIAH HEALY

Copyright © 1991 by

JEREMIAH HEALY

Translated by

YOSHIMI KIKUCHI

First published 1994 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by arrangement
with JED MATTES LITERARY AGENCY INC.
through TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.

デニス・シュエットの思い出に

死を選ぶ権利

登場人物

- ジョン・フランシス・カディ……………私立探偵
メイジー・アンドラス……………法学教授
エンリケ・クエルボ・ドゥラン……………メイジーの前夫。医者
ラモン(レイ)・クエルボ……………エンリケの息子
タッカー・ヒーバート……………メイジーの夫。元プロ・テ
ニス選手
イネス・ローハ……………メイジーの秘書
マノーロ……………メイジーの従僕
アレック・バコール……………ゲイの活動家
デル・ウォンズリー……………アレックの恋人
ウォルター・ストロック……………法学教授
ヴォネッタ・ギヴェンズ……………牧師
ポール・アイゼンバーグ……………医者
スティーヴン・オブライエン……………教会の簿記係
ルイス・ドールマン……………元地下鉄の運転士
ガンサー・ヤーリー……………スキンヘッドのリーダー
ウィリアム・イーリー……………刑事
ロバート・マーフィー……………警部補
ナンシー・マーア……………地方検事補

ことの始まりは、いわばひとつの挑戦だった。

マサチューセッツ州というのは、実際に祝うわけでもない祝日をもうけて州民に休日を与えようと、いかにやつきになっていることか、と私は考えていた。たとえば、四月の第三月曜日は愛国記念日として知られている。おそらく州民は静かに休んで従軍した人たちへの敬意を表すべきなのだろうが、実際にはボストン・マラソンのために休業の口実を与えているにすぎない。かつてテキサスから電話してきた友人——頑迷なヘダラス・カウボーイズファン——に、愛国記念日にこの町に着くとなるとそうとう苦労するぞと忠告したことがあった。友人は恐れ入ったといった

調子で訊いてきた。『おまえたちのところには、地元ニューイングランドのフットボール・チームのための祝日なんてのがあるのか？』事実、三月十七日（聖バトリックの祝日。アイルランドから毒虫と蛇を追放したと伝えられる聖人）を『緑色を着る日』と特別に定めているのはサフォーク郡だけである。アイルランド系の議員たちが超党派でその日を追放記念日と命名し、移民たちがボストン港からイギリス艦隊を追いつ出したあの重要な午後を祝うことにしたのだ。追放記念日のことはテキサスの友人に話していない。われわれの祝日感覚がますますうさんくさく思われるのではないかと危惧したからだ。

ナンシー・マアが言った。「寒い、凍えてしまう！」彼女は私の前に立ち、私は両腕でナンシーをくるむようにしていた。というか、より正確に言うなら、防寒用下着の上に分厚いスキー・セーターを着て黄褐色のL・L・ビーンのパーカをまとった彼女を抱えていた。十二月初旬の寒さの厳しい土曜日の夕刻、私たちはボイルストン・ストリートの四万人の向こう見ずな群衆にまじって、通り向かいにあるブルーデンシャル・センターの高くなったパティ

オに飾られた、クリスマス・ツリーに照明が入るのを待っていた。高さ五十フィートのモミの木は、毎年カナダのノヴァ・スコシア州からポストン市に寄贈されるものだ。その贈り物は何かを記念しているのだろうが、それが何だったのか、休日の口実ということ以外、私には思い出せなかった。

アコードオン式の台座にのった男がカメラとアーク灯を調整していた。小賢^{こざか}しい連中数百人は、ブルーデンシヤル・センタールの上階やら新しいハインズ・コンヴェンション・センタールの窓のなかから見守っている。パリス・シネマのあたりから、ソーセージとコショウのにおいが漂っていた。

ナンシーが言った。「良心を疑うわ」

「何のことかな？」

「こんなに寒いのに時間どおり始めないなんて、良心を疑うってこと」

ナンシーをもう少し強く抱き締めながら、私はすぐそばの連中を見まわしてみた。ハイスクールやカレッジの若い

連中は寒気に対する備えが充分とは言えず、足を踏み鳴らしながら、仲間うちで滑稽な悪態を次々と繰りだしていた。より私の齢に近い親たちは、ミトンの手袋をはめた子供の手をこすったり、ポケットやハンドバッグからティシュを取りだして、赤くなつた小さな鼻を拭いてやつたりしていた。耳あてをつけた警官が二人、じつと寒さに耐えながら、油断なく目を光らせて立っている。これまでのところ群衆のお行儀はよかつたが、ときおり声を合わせた叫びが上がつていた。群衆の背後の低まつたところにあるジャパニーズ・レストランが熱燗^{あつかん}でも出すことを思いついていれば、ひと財産作っていたはずだ。

ナンシーは芯から寒さに震えていたが、私はラグビーのジャージーとコードデュロイのズボンにコートをもとっているだけだった。私の祖先の土地、アイルランドのケリー州にはヴァイキングの一部が渡来してきていたに違いない。この身に冬の寒気がこたえるということがほとんどないのだ。

ナンシーの気を紛らわせてやろうとして、私は言った。

「知ってるかな、昔はここにゴール・ラインがあったんだ」

「ゴール・ライン？」

「マラソンのさ」

返事はなし。

「ボストン・マラソンのだか？」

ナンシーが強ばった首を回し、顔をしかめて私を見た。

黒い髪は秋からいくぶん長めになっている。間隔の開いた青い目。鼻から両頬にかけてソバカスが散らばっている。

「わたしたちみんなが日雇いの私立探偵というわけじゃないのよ、ジョン・カディ」

「言い換えると？」

「言い換えると、わたしは生まれてこのかたこの町に住んでるけど、まだ一度も、実際にこの目でボストン・マラソンを見たことがないってこと」

「冗談なのかな？」

「冗談を言うには寒すぎるわ」

「しかし、マラソンの日は祝日のはずだが」

ナンシーは私の腕のなかで肩をすくめた。「子供のころは、交通渋滞がひどすぎて、サウス・ボストンからここまで出てこれなかった。法律学校にいたときには、一日空いたことを神に感謝して、勉強してたわ」

「ナンス、マラソンの日は郡庁舎も休みなんだ。いまの身分での言いわけは？」

「そんな長い距離を走ろうっていう愚かしい知り合いがいなかったってことね」

「愚かじゃないさ」

「愚かよ」

「愚かじゃない」

彼女は笑いをこらえていた。「そうよ」

「違う」

「あなた、自分も走れるって思ってるみたいね」

「走れると思う」

「ジョン、あなた大きすぎるわ」

「六フィート二インチちよつとで大きすぎることはない」

「わたしの言ってるのは、重すぎるってこと。テレビで観

る人たちはひよろ長いわよ」

「百九十ポンドちよつとで重すぎることはない。それに、マラソンを走ることになれば減量もするだろう」

「ジョン、とにかくあなたもう……」

ナンシーはあとの言葉を飲み込もうとしたが、すでに私の耳に入ってしまった。

私は問いたでした。「もう何だつて？」

「気にしないで」

「もう若くはない、きみはそう言ったんだ。マラソンを走るのは齡を食いすぎている、と思つてゐるわけだ」

スピーカーからキーンという音が聞こえてきた。パティオのツリーの下で、私よりも齡を食つてゐる数人の男が背の高いマイクをいじつてゐた。やがて、拡声装置から男の声が聞こえてきた。「ブルーデンシャル・センターを代表しまして、ご参集のみなさまに御礼申し上げます——」

挨拶のその先は群衆の歓声に飲み込まれて聞こえなくなつた。

どよめきに負けないう、私はナンシーの耳もとに口を

寄せて言つた。「いまでは、この通りの二、三ブロック先になつてゐるんだ」

「何？」

「いまでは、この通りの——」

「何が？」

「マラソンのゴール・ラインさ。昔は、ちようどいまわれわれが立つてゐるあたりにあつた。しかし、ブルーデンシャル・センターが事業計画の縮小を決定したときに、ジョン・ハンコック・タワーがレースのスポンサーを引き受けて、ゴール・ラインをほぼタワーの下に移動したんだ」私はジョン・ハンコック・タワーを指さした。ポストンの目印のひとつとなつてゐるその藍色のガラス張りの建造物は、竣工直後、地面に突き刺さつた矢のような形態に四×十フイートの窓が並んでゐるので話題になつたのだが、いまや展望台からの眺めのほうで有名になつてゐた。

ナンシーは振り向かなかつた。「興味深い話。でも、やっぱり愚かよ」

マイクでは司祭が長々しい祈りを捧げてゐた。私はエム

パイア保険会社のほうに目を移した。かつての勤め先だ。エムパイアは、リトル・リーグのチームのスポンサーすら引き受けたことはないと思う。

司祭のあと、ボストン市長のフリンがマイクの前に立った。さいわいその挨拶は短かったが、次のノヴァ・スコシア州知事がいつ終わるとも知れない演説を始めた。まるで要領を得ない内容だ。私の腕のなかでナンシーが体を丸め、背中をもたせかけてきた。

私たちから十フィートほどのところで、ボストン・カレッジのチーム選手のジャケットを着た四人の若者がシュプレヒコールを上げはじめた。「くそつたれツリーに灯をともせ、くそつたれツリーに灯をともせ」

私は笑い声を上げた。ナンシーがつぶやいた。「あなたって軽蔑すべき人ね」

ようやく、ボストン・ポップス・オーケストラの名誉指揮者ハリー・エリス・ディクソンの番になった。彼がサンタクロースを紹介すると、子供たちのあいだで歓声が起こり、小さな手がさかんに振られた。子供たちの多くはパパ

やママに肩車されている。やがて、ハリー・ディクソンがクリスマス・キャロルを数曲指揮した。ヘオ・カム・オール・ユー・フェイスフル、ヘジョイ・トウ・ザ・ワールド、ヘハーク・ザ・ヘラルド・エンジェルズ・シング。歌詞の最初の数行はみんな知っていたが、残りはダーダーと口ずさむのが大半だった。

キャロルのあいまにナンシーが溜め息をついた。「わたしたち、詩の最初の連しか知らない社会になってしまったのね」

貧弱な体をサンタの衣装で不格好にふくれ上がった男が二人、パティオの階段を踊りながら登っていった。

ナンシーが言った。「あの二人は誰なのかしら？」
「サンタの宦官^{かんがん}だな」

私の腕のなかでナンシーはまた肩をすくめた。「前言は取り消すわ。あなたって軽蔑にも値しない人ね」

さらに二、三曲キャロルが演奏されたあと、ツリーのてっぺんの星に灯がともった。群衆のあいだに、独立記念日の最初の爆竹がはじけたときのような反応が広がった。続

いて、何本も縦に連なった電球が輝きはじめる。やがて、赤、青、緑、黄の入り交じった塊りが上のほうで次々に灯りはじめると、個々の電球は見えなくなり、揺らいだ光の塊りが浮かび上がった。それが飛ぶように下におりていき、ツリー全体がその魔法に包まれる。

私たちは最後に〈聖夜〉を斉唱した。歌声の最後の部分が周囲のビル群に反響しているのを聞きながら、群衆は三々五々散っていった。

「あと半分ずつくらいかな？」

私がプチット・シーラのボトルを彼女のグラスにかざすと、ナンシーは首を振った。彼女は防寒用下着とセーターをプリント地のふんわりしたブラウスに着替えていた。瞳の色が映える色合いのブラウスだ。私たちは、シカゴで病院実習をしている医者から、私が借りているコンドミニアムのダイニング・テーブルに坐っていた。ブルーデデンシャル・センターから北にほんの二ブロックのところなので、ツリー点灯の式典会場からは、寒いのを我慢してちょっと

歩いてくればよかった。

寒いのは外氣ばかりではなかった。

ナンシーが命じた。「料理はわたしがしたのだから、後片づけはあなたよ」

私はワインにコルク栓をすると、テーブルの残り物を——ラム・チョップに、マッシュルームとソーセージを混ぜたライスを添えたなかなかいける夕食だった——片づけにかかった。料理の味ばかりか、その色どりや盛りつけまでほめてやったのに、ナンシーの気分は冷えきったままだった。

私はキッチンから声をかけた。「家事分担の件は話し合おうか、よく考えてみることにしよう」

返事はなし。

皿洗い機に皿をセットし、流しとカウンターをスポンジで拭く。

居間に戻ってみると、ナンシーは黄麻布を張ったソファに体を堅くして坐っていた。怒ったような表情を浮かべ、人差し指で両の目尻の涙をぬぐっている。

「ナンシー——」

「黙ってて、オーケイ？」

私は口をつぐんだ。

ナンシーが言った。「わたし泣くのは嫌いなものよ」

その点は間違いないさそうだ。地方検事補として、恐ろしい運命を目にきてきているのだ。すぐに泣くような人間では、彼女が身を置いてきたこの二年はおろか、その典型的な日々を一日たりともまっとうできないだろう。

私は訊いた。「扱ってる事件のひとつが原因なのかな？」

首が振られる。

「健康上の問題？ 肉体的な？」

「違うわ、あなたのせいよ」

「私の？」

「そうよ」

「この顔？ 口臭でも？ 私の——」

「ふざけないで、ジョン。つまり……」

私はそばへ寄っていった。止まれとは言われなかったの

で、彼女の隣に腰をおろす。

ナンシーは私に対して横向きになり、深く息をついた。

「わたし、自分の感情について話すのは得意じゃないのよ。これまでそうだったことはなかったし」

「心を動かされたことがなく——」

「黙って聞いてて、オーケイ？」

「オーケイ」

彼女はもう一度息をついた。「わたし、幼いときに父を亡くしたのよ、ジョン。三歳のときに。サウス・ポストンでは、ツリーの点灯式なんでものはなかったわ。たとえあったとしても、肩車して見せてくれる父がいなかった。ほんとうのところ、父の記憶はないの。実生活での記憶は。写真の顔を知ってるだけ。母が持ってた写真の。祝日は、とくにクリスマスは、母にとってつらいものだったわ。実生活での彼をよく覚えてるわけだから」

私は妻のベスとすごした祝日のことを思い返した。それから、彼女を癌で亡くしたあとの期間を思い起こす。

「法律学校の最終学年のときに母を亡くすと、わたし、も